

俳人蕪村

正岡子規

青空文庫

緒言

芭蕉ばしょう新たに俳句界を開きしよりここに二百年、その間出づるところの俳人少からず。あるいは芭蕉を祖述し、あるいは檀林だんりんを主張し、あるいは別に門戸を開く。しかれどもその芭蕉を尊崇するに至りては衆口一齊に出づるがごとく、檀林等流派を異にする者もなお芭蕉を排斥せず、かえつて芭蕉の句を取りて自家俳句集中に加うるを見る。ここにおいてか芭蕉は無比無類の俳人として認められ、また一人のこれに匹敵する者あるを見ざるの有様なりき。芭蕉は実に敵手なきか。曰くいわ、否いな。

芭蕉が創造の功は俳諧史上特筆すべきものたること論を^ま俟たず。この点において何^{なんびと}人かよくこれに^{りようが}凌駕せん。芭蕉の俳句は変化多きところにおいて、雄^{ゆうこん}渾なるところにおいて、高雅なるところにおいて、俳句界中第一流の人たるを得。この俳句はその創業の功より得たる名誉を加えて無上の賞讃を博したれども、余より見ればその賞讃は俳句の価値に対して過分の賞讃たるを認めざるを得ず。誦するにも堪^たえぬ芭蕉の俳句を註釈して勿^{もつたい}体つける俳人あれば、縁もゆかりもなき句を刻して芭蕉塚と称^{とな}えこれを尊ぶ俗人もありて、芭蕉という名は徹頭徹尾尊敬の意味を表したる中に、咳唾^{がいだたま}珠を成し句々吟誦するに堪えながら、世人はこれを知らず、宗匠はこれを尊ばず、百年間空しく瓦礫^{がれき}とともに埋められ

て光彩を放つを得ざりし者を蕪村ぶそんとす。蕪村の俳句は芭蕉ばしやうに匹敵すべく、あるいはこれに凌駕するところありて、かえつて名譽を得ざりしものは主としてその句の平民的ならざりしと、蕪村以後の俳人のことごとく無学無識なるとに因よれり。著作の価値に対する相当の報酬なきは蕪村のために悲しむべきに似たりといえども、無学無識の徒に知られざりしはむしろ蕪村の喜びしところなるべきか。その放縱ほうしやうふき不羈ふき世俗の外に卓立せしところを見るに、蕪村また性行において尊尚すべきものあり。しかして世はこれを容いれざるなり。

蕪村の名は一般に知られざりしにあらず、されど一般に知られたるは俳人としての蕪村にあらず、画家としての蕪村なり。蕪村

歿後ぼつごに出版せられたる書を見るに、蕪村画名の生前において世に伝わらざりしは俳名の高かりしがために圧せられたるならんと言えり。これによれば彼が生存せし間は俳名の画名を圧したらんかとも思われるれど、その歿後今日に至るまでは画名かえって俳名を圧したること疑うべからざる事実なり。余らの俳句を学ぶや類題集中蕪村の句の散在せるを見てややその非凡なるを認めこれを尊敬すること深し。ある時小集の席上にて鳴めいせつ雪氏せついう、蕪村集を得来たりし者には賞を与えんと。これもと一場の戲言なりとはいへども、この戲言はこれを欲するの念切せつなるより出でしものにして、その裏面にはあながちに戲言ならざるものありき。はたしてこの戲言は同氏をして蕪村句集を得せしめ、余らまたこれを借り

覽みて大いに発明するところありたり。死馬の骨を五百金に買いたるたとえ諭も思い出されておかしかりき。これ実に数年前（明治二十六年か）のことなり。しかしてこの談一たび世に伝わるや、俳人としての蕪村は多少の名誉をもつて迎えられ、余らまた蕪村派と目もくせらるるに至れり。今は俳名再び画名を圧せんとす。

かくして百年以後にはじめて名を得たる蕪村はその俳句において全く誤認せられたり。多くの人は蕪村が漢語を用うるをもつてその唯一の特色となし、しかもその唯一の特色が何なに故ゆえに尊ぶべきかを知らず、いわんや漢語以外に幾多の特色あることを知る者ほとんどこれなきに至りては、彼らが蕪村を尊ぶゆえんを解するに苦しむなり。余はここにおいて卑見を述べ、蕪村が芭蕉に匹敵

するところはたしていづくにあるかを弁せんと欲す。

積極的美

美に積極的と消極的とあり。積極的美とはその意匠の壮大、雄渾、けいけん勁健、かっぱつ艶麗、かっぱつ活潑、奇警なるものをいい、消極的美はその意匠の古雅、幽玄、悲惨、沈静、平易なるものをいう。概して言えば東洋の美術文学は消極的美に傾き、西洋の美術文学は積極的美に傾く。もし時代をもつて言えば国の東西を問わず、上世には消極的美多く後世には積極的美多し。（ただし壮大雄渾なるものに至りてはかえつて上世に多きを見る）されば唐時代の文学

より悟入したる芭蕉は俳句の上に消極の意匠を用うること多く、従つて後世芭蕉派と称する者また多くこれに倣ならう。その寂さびといい、雅といい、幽玄といい、細みといい、もつて美の極となすもの、ことごとく消極的ならざるはなし。(ただし壮大雄渾の句は芭蕉これあれども後世に至りては絶えてなし)ゆえに俳句を学ぶ者消極的美を唯一の美としてこれを尚とうとび、艶麗なるもの、活澆なるもの、奇警なるものを見ればすなわちもつて邪道となし卑俗となす。あたかも東洋の美術に心酔する者が西洋の美術をもつてことごとく野卑なりとして貶へんするがごとし。艶麗、活澆、奇警なるもの野卑に陥りやすきはもとよりしかり。しかれども野卑に陥りやすきをもつて野卑ならざるものをも棄すつるはその弁別の明なきがゆ

えなり。しかして古雅幽玄なる消極的美の弊害は一種の厭味いやみを生じ、今日の俗宗匠の俳句の俗にして嘔吐おうとを催さしむるに至るを見るに、かの艶麗ならんとして卑俗に陥りたるものに比して毫ごうも優るところあらざるなり。

積極的美と消極的美とを比較して優劣を判せんことは到底出来得べきにあらず。されども両者ともに美の要素なることは論を竣またず。その分量よりして言わば消極的美は美の半面にして積極的美は美の他の半面なるべし。消極的美をもつて美の全体と思惟しせるはむしろ見聞の狭きより生ずる誤謬ごびゅうならんのみ。日本の文学は源平以後地に墜おちてまた振わず、ほとんど消滅し尽せる際に當つて芭蕉が俳句において美を發揮し、消極的の半面を開きたるは

彼が非凡の才識あるを証するに足る。しかもその非凡の才識も積
 極的美の半面はこれを開くに及ばずして逝ゆきぬ。けだし天は俳諧
 の名譽を芭蕉の専有に帰せしめずしてさらに他の偉人を待ちしに
 やあらん。去きよらい来、丈じようそう草もその人にあらざりき。其角きかく、嵐らんせ
 雪つもその人にあらざりき。五色墨ごしきずみの徒もとよりこれを知らず。
 新しん虚みなしぐり栗なんなの時何者をか攫つかまんとして得るところあらず。芭蕉死
 後百年に垂なんなんとしてはじめて蕪村は現われたり。彼は天命を負う
 て俳諧壇上に立てり。されども世は彼が第二の芭蕉たることを知
 らず。彼また名利に走らず、聞達を求めず、積極的美において自
 得したりといえども、ただその徒とこれを楽しむに止とどまれり。

一年四季のうち春夏は積極にして秋冬は消極なり。蕪村最も夏

を好み、夏の句最も多し。その佳句もまた春夏の二季に多し。これすでに人に異なるを見る。今試みに蕪村の句をもつて芭蕉の句と対照してもつて蕪村がいかに積極的なるかを見ん。

四季のうち夏季は最も積極なり。ゆえに夏季の題目には積極的なるもの多し。牡丹ぼたんは花の最も艶麗なるものなり。芭蕉集中牡丹を詠ずるもの一、二句に過ぎず。その句また

尾張より東武に下る時

牡丹しへん深いづくわけはち出るなごり蜂の名残かな

芭蕉

桃隣新宅自画自讃

寒からぬ露や牡丹の花の蜜みつ 同

等のごとき、前者はただ季の景物として牡丹を用い、後者は牡丹

を詠じてきわめて拙つたなきものなり。蕪村の牡丹を詠ずるはあながち
 力を用いるにあらず、しかも手に随したがつて佳句を成す。句数も二十
 首の多きに及ぶ。そのうち数首を挙ぐれば

牡丹散つて打重なりぬ二三片ぺん

牡丹剪きつて気の衰へし夕ゆふべかな

地車のとゞろとひゞく牡丹かな

日光の土にも彫ほれる牡丹かな

不動画ゑがく琢磨たくまが庭の牡丹かな

方百里雨雲よせぬ牡丹ほうかな

金屏きんびやうのかくやくとして牡丹かな

蟻垤

ぎわうきゆう
 蟻王宮朱門を開く牡丹かな

波翻舌本吐紅蓮

えんわう
 閻王の口や牡丹を吐かんとす

その句またまさに牡丹と艶麗を争わんとす。

若葉もまた積極的の題目なり。芭蕉のこれを詠ずるもの一、二句にして

招提寺

若葉して御目の雫ぬぐはゞや
 芭蕉

日光

あらたふと青葉若葉の日の光
 同

のごとき、皆季の景物として応用したるに過ぎず。蕪村には直ち

に若葉を詠じたるもの十余句あり。皆若葉の趣味を發揮せり。例、

山にそふて小舟漕ぎ行く若葉かな

蚊帳かやを出て奈良を立ち行く若葉かな

不尽ふじ一つ埋み残して若葉かな

窓の灯ひの梢こずゑに上る若葉かな

絶頂の城たのもしき若葉かな

蛇だを截きつて渡る谷間の若葉かな

をちこちに滝の音聞く若葉かな

雲くもの峰みねの句を比較せんに

ひらくとあぐる扇や雲の峰 芭蕉

雲の峰いくつ崩くづれて月の山 同

游力亭

湖や暑さを惜む雲の峰 同

月山がつさんの句やや力強けれど、なお蕪村のに比すべくもあらず。

蕪村の句多からずといえども、

楊州の津も見えそめて雲の峰

雲の峰したく四沢の水の涸かれてより

旅意

二十日路はつかぢの背中に立つや雲の峰

のごとき皆十分の力あるを覚ゆ。五月雨さみだれは芭蕉にも

五月雨の雲吹き落せ大井川 芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川もがみかは 同

のごとき雄壮なるものあり。蕪村の句またこれに劣らず。

五月雨の大井越えたるかしこさよ

五月雨や大河たいがを前に家二軒

五月雨の堀たのもしきとりで砦かな

夕立の句は芭蕉になし。蕪村にも二、三句あるのみなれども、

雄壮当るべからざるの勢いあり。

夕立や門脇かどわきどの殿の人だまり

夕立や草葉をつかむすずめむら雀

双林寺独吟千句

夕立や筆も乾かわかず一千言

時ほととぎす鳥の句は芭蕉に多かれど、雄壮なるは

時鳥声横よこたふや水の上 芭蕉

の一句あるのみ。蕪村の句のうちには

時鳥ひつぎ柩をつかむ雲間より

時鳥平安城をすぢかひに

鞆さやばしる友切丸ともきりまるや時鳥

など極端にもものしたるものあり。

桜の句は蕪村よりも芭蕉に多し。しかも桜のうつくしき趣を詠よ

み出でたるは

四方しはうより花吹き入れてにほ鳩の海 芭蕉

木このもとに汁もなます鱧も桜かな 同

しばらくは花の上なる月夜かな 同

奈良七重七堂伽藍八重桜 同

のごとくに過ぎず。蕪村に至りては

阿古久曾あこくそのさしぬき振ふ落花かな

花に舞はで帰るさ憎ししらびやうし白拍子

花の幕兼けんかう好のぞを覗く女あり

のごとき妖艶ようえんを極めたるものあり。そのほか春月、春水、暮春

などいえる春の題を艶なる方に詠み出でたるは蕪村なり。例たとえば

伽羅きやらくさき人の仮寝や 朧おぼろづき月

をんな女をんな俱して内裏拝まん朧月

葉盗む女やはある朧月

河内路かはちぢや東風吹き送る巫みこが袖そで

片町にさらさ染るや春の風そむ

春水や四条五条の橋の下

梅散るや螺鈿らでんこぼるゝ卓の上

玉ぎよくじん人の座右つばきに開く椿かな

梨なしの花月に書読ふみむ女あり

閉帳の錦垂れたり春の夕

折釘をれくぎに烏帽子ゑぼし掛けたり春の宿

ある人に句を乞はれて

返歌なき青女房よ春の暮

琴心挑美人

妹いもが垣根さみせんくさ三味線草の花咲きぬ

いずれの題目といえども芭蕉または芭蕉派の俳句に比して蕪村の積極的なることは蕪村集を繙く者誰かこれを知らざらん。一々ここに贅せず。

客観的美

積極的美と消極的美と相対するがごとく、客観的美と主観的美ともまた相對して美の要素をなす。これを文学史の上に照すに、上世には主観的美を發揮したる文学多く、後世に下るに従い一時代は一時代より客観的美に入ること深きを見る。古人が客観に動かされたる自己の感情を直叙するは、自己を慰むるために、はた

当時の文学に幼稚なる世人をして知らしむるために必要なりしならん。これ主観的美の行われたるゆえんなり。かつその客観を写すところきわめて麤^そ鹵^ろにして精細ならず。例えば絵画の輪郭ばかりを描きて全部は観^みる者の想像に任すがごとし。全体を現わさんとして一部を描くは作者の主観に出^いづ。一部を描いて全体を想像せしむるは観る者の主観に訴^いうるなり。後世の文学も客観に動かされたる自己の感情を写すところにおいて毫も上世に異ならずといえども、結果たる感情を直叙せずして原因たる客観の事物のみ描写し、観る者をしてこれによりて感情を動かさしむること、あたかも実際の客観が人を動かすがごとくならしむ。これ後世の文学が面目を新たにしたるゆえんなり。要するに主観的美は客観

を描き尽さずして観る者の想像に任すにあり。

客観的、主観的両者いづれが美なるかは到底判し得べきにあらず。積極的、消極的両美の並立^{へいりつ}すべきがごとく、これもまた並立して各自の長所を現わすを要す。主観を叙して可なるものあり、叙して不可なるものあり。客観を写して可なるものあり、写して不可なるものあり。可なるものはこれを現わし不可なるものはこれを現わさず。しかして後に両者おのおの見るべし。

芭蕉の俳句は古来の和歌に比して客観的美を現わすこと多し。しかもなお蕪村の客観的なるには及ばず。極度の客観的美は絵画と同じ。蕪村の句は直ちにもって絵画となし得べきもの少からず。芭蕉集中全く客観的なるものを挙げれば四、五十句に過ぎざるべ

く、中につきて絵画となし得べきものをえらみなば

うぐひす鶯や柳のうしろやぶ藪の前 芭蕉

梅が香にのつと日の出る山路かな 同

古寺の桃に米踏ふむ男かな 同

時鳥大竹藪を漏る月夜 同

さゝれがに蟹足はひ上る清水かな 同

荒海や佐渡さどに横よこたふ天の川 同

あのしし猪も共に吹かるゝ野分のわきかな 同

くらつぽ鞍壺だいこひきに小坊主乗るや大根引 同

塩鯛の齒茎うをも寒し魚たなの店 同

等二十句を出でざらん。宇陀うだの法師に芭蕉の説なりとて掲げたる

を見るに

春風や麦の中行く水の音 木導

師説に云う、景氣の句世間容易にするもつてのほかのことなり。大事の物なり。連歌に景曲と云いいにしえの宗匠深くつつしみ一代一兩句には過ぎず。景氣の句初心まねよきゆえ深くいましめり。俳諧は連歌ほどはいわず。総別景氣の句は皆ふるし。一句の曲なくては成りがたきゆえつよくいましめおきたるなり。木導が春風景曲第一の句なり。後代手本たるべしとて褒美ほうびに「かげろふいさむ花の糸口」という脇わきして送られたり。平句同前なり。歌に景曲は見様けんよう体に属すと定家卿もの給うなり。寂じ蓮やくれんの急雨定頼さだより卿の宇治の網代木あじろぎこれ見様体の歌なり。

とあり。景氣といい景曲といい見様体という、皆わが謂うところの客観的なり。もつて芭蕉が客観的叙述を難かたしとしたること見るべし。木導の句悪句にはあらねどこの一句を第一とする芭蕉の見識はきわめて低くきわめて幼し。芭蕉の門弟は芭蕉よりも客観的の句を作る者多しといえども、皆客観を写すこと不完全なれば直ちにこれを画とせんにはなお足らざるものあり。

蕪村の句の絵画的なるものは枚挙すべきにあらねど、十余句を挙ぐれば

木瓜ほけの陰に顔たくひすむ雉きぎすかな

釣鐘にとまりて眠る胡蝶こてふかな

やぶ入いりや鉄漿かねもらひ来る傘かさの下

をはらめ 小原女の五人揃あはせて拾はかな

照とも射ししてさよやくあふみやはた 近江八幡あふみやはた かな

葉ほうらくく火串ほぐしに白はき花見はゆる

卓上すの鮓すに眼寒あをさぎし観魚亭はぎ

夕風あをさぎ 水青はぎ 鷺はぎの脛はを打つ

四五人をどりに月落をちかをる踊をかな

日ななめは斜関屋やりの槍とんぼに蜻蛉なかな

柳散かり清水か涸れ石ところ／＼

かほひがねや穂ほたで蓼の上を塩車

鍋提さげて淀よどの小橋を雪の人

てらくくと石に日の照る枯野かれのな

むさゝびの小鳥喰はみ居をる枯野かな

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

のごとし。一事一物を画き添えざるも絵となるべき点において、蕪村の句は蕪村以前の句よりもさらに客観的なり。

人事的美

天然は簡単なり。人事は複雑なり。天然は沈黙し人事は活動す。簡単なるものにつきて美を求むるは易やすく、複雑なるものは難かたし。沈黙せるものを写すは易く、活動せるものは難し。人間の思想、感情の単一なる古代にありて比較的によく天然を写し得たるは易

きより入りたる者なるべし。俳句の初めより天然美を發揮したるも偶然にあらず。しかれども複雑なるものも活動せるものも少しくこれを研究せんか、これを描くことあながち難きにあらず。ただ俳句十七字の小天地に今までは辛うじて一山一水一草一木を写し出だししものを、同じ区劃くかくのうちに變化極まりなく活動止まざる人世の一部分なりとも縮写せんとするは難中の難に属す。俳句に人事的美を詠じたるもの少きゆえんなり。芭蕉、去來はむしろ天然に重きを置き、其角、嵐雪は人事を写さんとして端なく佶きつ屈聲牙つづがに陥り、あるいは人をしてこれを解するに苦しましむるに至る。かくのごとく人は皆これを難しとするとところに向つて、ひとり蕪村は何の苦もなく進み思うままに濶歩かっぱ横行せり。今人こんじん

はこれを見てかえつてその容易なるを認めしならん。しかも蕪村以後においてすらこれを学びし者を見ず。

芭蕉の句は人事を詠よみたるもの多かれど、皆自己の境涯を写したるに止まり

鞍くらつぽ壺ぼに小坊主のるや大根だいこひき引

のごとく自己以外にありて半ば人事美を加えたるすらきわめて少し。

蕪村の句は

行く春や選者を恨む歌の主

命婦みやうぶより牡丹餅ぼたもちたばす彼岸ひがんかな

短夜みじかよや同心衆かいてうづの川手かみて水

少年の矢数問ひよる念者ぶり

水の粉やあるじかしこき後家の君

虫干や甥の僧訪ふ東大寺

祇園会や僧の訪ひよる梶がもと

味噌汁をくはぬ娘の夏書かな

鮓つけてやがて去にたる魚屋かな

禪に団扇さしたる亭主かな

青梅に眉あつめたる美人かな

旅芝居穂麦がもとの鏡立て

身に入むや亡妻の櫛を閨に踏む

門前の老婆子薪貪る野分かな

栗そなふゑしん恵心の作のみだぼとけ弥陀仏

書記典主てんず故園に遊ぶ冬とうじ至かな

沙弥しゃみ律師ころりくとふすま衾かな

さゝめことづきん頭巾にかつくはをり羽折かな

孝行な子供等に蒲団一つづゝ

のごとき数え尽さず、これらのじゆう仕必ずしも力を用いしものにあらずといえども、皆よく蕪村の特色を現わして一句だに他人の作とまごうべくもあらず。天てんぴん稟とは言いながら老熟の致すところならん。

天然美に空間的のもの多きはことに俳句においてしかり。けだし俳句は短くして時間を容いる能あたわざるなり。ゆえに人事を詠ぜ

んとする場合にも、なお人事の特色とすべき時間を写さずして空
間を写すは俳句の性質のしからしむるに因^よる。たまたま時間を写
すものありとも、それは現在と一様なる事情の過去または未来に継
続するに過ぎず。ここに例外とすべき蕪村の句二首あり。

御手討おてうちの夫婦なりしを更ころもがへ衣

打ちはたす梵論ぼろつれだちて夏野かな

前者は過去のある人事を叙し、後者は未来のある人事を叙す。
一句の主眼が一は過去の人事にあり、一は未来の人事にあるは二
句同一なり、その主眼なる人事が人事中の複雑なるものなること
も二句同一なり。かくのごときものは古往こおう今来こんらい他にその例を見
ず。

理想的美

俳句の美あるいは分つて実験的、理想的の二種となすべし。実験的と理想的との區別は俳句の性質においてすでにしかるものあり。この種の理想は人間の到底経験すべからざること、あるいは實際あり得べからざること詠みたるものこれなり。また実験的と理想的との區別俳句の性質にあらずして作者の境遇にあるものあり。この種の理想は今人にして古代の事物を詠み、いまだ行かざる地の景色風俗を写し、かつて見ざるある社会の情状を描き出すものこれなり。ここに理想的というは実験的に対していうもの

にして両者を包含す。

文学の実験に依よらざるべからざるはなお絵画の写生に依らざるべからざるがごとし。しかれども絵画の写生にのみ依るべからざるがごとく、文学もまた実験にのみ依るべからず。写生にのみ依らんか、絵画はついに微妙の趣味を現わす能わざらん、実験にのみ依らんか、尋常一様の経歴ある作者の文学は到底陳ちんとう套を脱する能わざるべし。文学は伝記にあらず、記実にあらず、文学者の頭脳は四畳半の古机にもたれながらその理想は天地八荒のうちに追しょうよう遙むげしさいして無碍自在に美趣を求む。羽なくして空に翔かるべし、鱗ひれなくして海に潜むべし。音なくして音を聴きくべく、色なくして色を観るべし。かくのごとくして得來たるもの、必ず斬ざん新奇警しん

人を驚かすに足るものあり。俳句界においてこの人を求むるに蕪村一人あり。ひるがえ翻つて芭蕉はいかんと見ればその俳句平易高雅、奇を銜げんせず、新を求めず、ことごとく自己が境涯の実歴ならざるはなし。二人は実に両極端を行きて毫も相似たるものあらず、これまた蕪村の特色として見ざるべけんや。

芭蕉も初めは

菖蒲しやうぶ生り軒いの鰯わしの髑され髑かう

のごとき理想的の句なきにあらざりしも、一たび古池の句に自家の立脚地を定めし後は、徹頭徹尾記実の一法に依りて俳句を作れり。しかもその記実たる自己が見聞せるすべての事物より句を探り出いだすにあらず、記実の中にもただ自己を離れたる純客観の

事物は全くこれを抛擲ほうてきし、ただ自己を本としてこれに関連する事物の實際を詠ずるに止まれり。今日より見ればその見識ひくの卑きこと実に笑うに堪えたり。けだし芭蕉は感情的に全く理想美を解せざりしにはあらずして、理窟りくつに考えて理想は美にあらずと断定せしや必ひつせり。一世に知られずして始終逆境に立ちながら、堅固なる意思に制せられて謹嚴に身を修おさめたる彼が境遇は、かりそめにも嘘うそをつかじとて文学にも理想を排したるなるべく、はた彼が愛読したりという杜詩としに記實的の作多きを見ては、俳句もかくすべきものなりとおのずから感化せられたるにもあらん。芭蕉の門人多しといえども、芭蕉のごとく記實的なるは一人もなく、また芭蕉は記實的ならずとてそれを悪く言いたる例も聞かず。芭蕉は連

句において宇宙を網羅し古今を翻ほんろう弄せんとしたるにも似ず、俳句にはきわめて卑ひきよう怯ひきようなりしなり。

蕪村の理想とうとを尚とうとぶはその句を見て知るべしといえども、彼がかつて召しょうは波はに教えたりという彼の自記はよく蕪村を写いし出いだせるを見る。曰く

(略) 其角を尋ね嵐雪を訪い素堂を倡い鬼貫に伴う、日々この四老に会してわずかに市城名利の域を離れ林園に遊び山水にうたげし酒を酌くみて談笑し句を得ることはもつぱら不用意を貴ぶ、かくのごとくすること日々ある日また四老に会す、幽賞雅懐はじめのごとし、眼を閉じて苦吟し句を得て眼を開く、たちまち四老の所在を失す、しらずいずれのところに仙化して去るや、

恍^{こう}として一人みずから佇^{たたず}む時に花香風に和し月光水に浮ぶ、これ子が俳諧の郷なり（略）

蕪村はいかにして理想美を探り出だすべきかを召波に示したるなり。筆にも口にも説き尽すべからざる理想の妙趣は、輪^{りん}扁^{べん}の木を断^きるがごとくついに他に教うべからずといえども、一棒の下に頓悟^{とんご}せしむるの工夫なきにしもあらず。蕪村はこの理想的のこゝとをなお理想的に説明せり。かつその説明的なると文学的なるとを問わず、かくのごとき理想を述べたる文字に至りては上下二千載我に見ざるところなり。奇文なるかな。

蕪村の句の理想と思^{おほ}しきものを挙ぐれば

河童の恋する宿や夏の月

湖へ富士を戻すもとどや五月雨さつきあめ

名月うさぎや兔のわたる諏訪すはの湖うみ

指南車こちを胡地こちに引き去る霞かすみかな

滝口に燈ひを呼ぶ声や春の雨

白梅かんや墨芳こうろくわんばしき鴻臚館

宗鑑そうかんに葛くずみづ水たまふ大臣おとどかな

実方さねかたの長ながびつ櫃な通る夏野なつかな

朝比奈あそが曾我そごを訪ふ日ひや初はつ鰹かつを

雪信ゆきのぶが蠅打はへち払すずりふ硯すずりかな

子こ子この水みづや長沙ちやうさの裏長屋

追剥おひはぎを弟子でしに剃りけり秋の旅

おにつら
鬼貫や新酒の中の貧に処す

とぼどの
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

新右衛門蛇足をさそふ冬至かな

寒月や衆徒しゅとの群議の過ぎて後のち

高野

隠れ住んで花に真田さなだが謡うたかな

歴史を借りて古人を十七字中に現わし得たるもの、もって彼が
技ぎ倆りょうを見るに足らん。

複雑的美

思想簡單なる時代には美術文学に対する嗜好しこうも簡單を尚ぶは自然の趨すうせい勢せいなり。わが邦くに千余年間の和歌のいかに簡單なるかを見れば、人の思想の長く發達せざりし有様も見え透く心地す。この間に立ちて形式の簡單なる俳句はかえつて和歌よりも複雑なる意匠を現わさんとして漢語を借り来たり佶屈きつくつなる直訳的句法をさえ用いたりしも、そは一時の現象たるにとどまり、古池の句はついに俳句の本尊として崇拜せらるるに至れり。古池の句は足引あしびきの山鳥の尾のという歌の簡單なるに比すべくもあらざれど、なお俳句中の最も簡單なるものに属す。芭蕉はこれをもつてみずから得たりとし、終身複雑なる句を作らず。門人は必ずしも芭蕉の簡單を学ばざりしも、複雑の極点に達するにはなお遠かりき。

芭蕉は「発句ほつくは頭よりすらすらと言ひ下し来たるを上品とす」と言ひ、門人洒堂しゃどうに教えて「発句は汝がごとく物二、三取り集むる物にあらず、こがねを打ちのべたるごとくあるべし」と言えり。洒堂の句の物二、三取り集むるといは

鳩吹くや渋柿原の蕎麦畑そば

刈株や水田の上の秋の雲

の類なるべく、洒堂また常に好んでこの句法を用いたりとおぼし。しかれども洒堂のこれらの句は元禄の俳句中に一種の異彩を放つのみならず、その品格よりいふも鳩吹、刈株の句のごときは決して芭蕉の下にあらず。芭蕉がこの特異のところを賞揚せずして、かえってこれを排斥せんとしたるを見れば、彼はその複雑的美を

解せざりし者に似たり。

芭蕉は一定の真理を言わずして時に随い人により思い思いの教訓をなすを常とす。その洒堂をおし誨えたるもこれらの佳作をしりぞ斥けたるにはあらで、むしろその濫用をいまし誡めたるにやあらん。許六が「発句は取合せものなり」というに対して芭蕉が「これほど仕よきことあるを人は知らずや」といえるを見ても、あながち取合せを排斥するにはあらざるべし。されどここに言える取合せとは二種の取合せをいうものにして、洒堂のごとく三種の取合せをいうにあらざるは、芭蕉の句、許六の句を見て明らかなり。芭蕉また凡兆に対して「俳諧もさすがに和歌の一体なり、一句にしおりあるように作すべし」といえるもこの間の消息を解すべきものあり。

凡兆の句複雑というほどにはあらねど、また洒堂らと一般、句々材料充実して、かの虚字をもつて幹あっせん旋せんする芭蕉流とはいたく異なり。芭蕉これに対して今少し和歌の臭味を加えよという、けだし芭蕉は俳句は簡単ならざるべからずと断定してみずから美の区域を狭く劃かぎりたる者なり。芭蕉すでにかくのごとし。芭蕉以後言うに足らざるなり。

蕪村は立てり。和歌のやさしみ言い古し聞き古して紛ふんぶん々たる臭気はその腐敗の極に達せり。和歌に代りて起りたる俳句幾分の和歌臭味を加えて元禄時代に勃興ぼつこうしたるも、支麦しばく以後ようやく腐敗してまた拯すくうに道なからんとす。ここにおいて蕪村は複雑的しりぞ美を捉え来たりて俳句に新生命を与えたり。彼は和歌の簡單しりぞを斥

けて唐詩の複雑を借り来たれり。国語の柔軟なる、冗長なるに飽
 きはてて簡^{かん}勁^{けい}なる、豪壮なる漢語もてわが不足を補いたり。先
 に其角一派が苦辛して失敗に終りし事業は蕪村によつて容易に成
 就せられたり。衆人の攻撃も慮^{おも}るところにあらず、美は簡單なり
 という古来の標準も棄^すてて顧みず、卓然として複雑的美を成した
 る蕪村の功は没すべからず。

芭蕉の句はことごとく簡單なり。強^しいてその複雑なるものを求
 めんか、

鶯や柳のうしろ藪^{やぶ}の前

つゝじ活^いけて其陰^ひに干鱈^{たら}さく女

隠^かれ家^がや月と菊とに田三反

等の数句に過ぎざるべし。蕪村の句の複雑なるはその全体を通じてしかり。中につきて数句を挙ぐれば

草霞み水に声なき日暮かな

燕啼つばぬいて夜蛇を打つ小家かな

梨の花月に書読ふみむ女あり

雨後の月誰たそや夜ぶりの脛白はぎき

鮓すしをおす我れ酒かもす隣あり

五月雨や水に錢踏ふむ渡し舟

草いきれ人死しにをると札の立つ

秋風や酒肆しゆしに詩うたふ漁者ぎよしや樵者せうしや

鹿ながら山影さんえい門いるひに入日かな

鳴遠く鋏すゝぐ水のうねりかな

柳散り清水涸れ石ところ／＼

水かれ／＼ 蓼かあらぬか蕎麦か否か

我をいとふ隣家寒夜に鍋を鳴らす

一句五字または七字のうちなお「草霞み」「雨後の月」「夜蛇を打つ」「水に錢踏む」と曲折せしめたる妙は到底「頭よりすらすらと言い下し来たる」者の解し得ざるところ、しかも洒堂、凡兆らもまた夢寐にだも見ざりしところなり。客観的の句は複雑なりやすし。主観的の句の複雑なる

うき我に砧打て今は又やみね

のごとくに至りては蕪村集中また他にあらざるもの、もし芭蕉を

してこれを見せしめば惘然もうぜんじしつ自失言うところを知らざるべし。

精細的美

外に広きものこれを複雑と謂い、内に詳つまびらかなるものこれを精細と謂う。精細の妙は印象を明めいりよう瞭りようならしむるにあり。芭蕉の叙事形容に粗にして風韻に勝ちたるは、芭蕉の好んでなしたるところなりといえども、一は精細的美を知らざりしに因よる。芭蕉集中精細なるものを求むるに

ちまゆふ
 粽結片手にはさむ額髪

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

のごとき比較的にししか思わるるあるのみ。蕪村集中にその例を求むれば

鶯の鳴くやちひさ小き口あけて

あぢきなや椿落ち埋うづむ庭たつみ

やせずね瘦 臙の毛に微風あり衣がへ

月に対す君に投とあみ網の水煙

夏川をこすうれ嬉しさよ手に草履ざうり

あゆ鮎くれてよらで過よはぎ行く夜半の門かど

夕風や水青あをさぎ鷺の脛はぎを打つ

点滴に打たれてこもるかたつむり蝸牛

蚊の声す忍にんどう冬の花散るたびに

青梅に眉あつめたる美人かな

牡丹散ちって打ち重りぬ二三片

唐草に牡丹めでたき蒲団かな

引きかふて耳をあはれむ頭巾づきんかな

緑みどりご子の頭巾まぶか深きいとほしみ

真結まむすびの足袋はしたなき給仕かな

齒あらはに筆の氷を噛む夜かな

茶の花や石をめぐりて道を取る

等いと多かり。

庭たつみに椿の落ちたるは誰も考えつくべし。埋むとは言い得ぬなり。もし埋むに力入れたらんには俗句と成り了おわらん。落ち埋

むと字余りにして埋むを軽く用いたるは蕪村の力量なり。よき句にはあらねど、埋むとまで形容して俗ならしめざるところ、精細的美を解したるに因る。精細なる句の俗了しやすきは蕪村のつとに感ぜしところにやあらん、後世の俳家いたずらに精細ならんとしてますます俗に墮おつる者、けだし精細的美を解せざるがためなり。妙人の妙はその平凡なるところ、拙つたなきところにおいて見るべし。唐詩選を見て唐詩を評し、展覧会を見て画家を評するは殆あやうし。蕪村の佳句ばかりを見る者は蕪村を見る者にあらざるなり。

「手に草履」ということももし拙く言いのばしなば殺風景となりなん。短くも言い得べきを「嬉しさよ」と長く言いて、長くも言い得べきを「手に草履」と短く言いしもの、良工苦心のところな

らんか。

「鮎くれて」の句、かくのごとき意匠は古来なきところ、よしありたりとも「よらで過ぎ行く」とは言い得ざりしなり。常人をして言わしめば鮎くれしを主にして言うべし。そは平凡なり。よらで過ぎ行くところ、景を写し情を写し時を写し多少の雅趣を添う。顔しかめたりとも額に皺しわよせたりともかく印象を明瞭ならしめじ、ことは同じけれど「眉あつめたる」の一語、美人髻ほうふつ髻として前にあり。

蒲団引きおうて夜伽よとぎの寒さを凌しのぎたる句などこそ古人も言えれ、蒲団その物を一句に形容したる、蕪村より始まる。

「頭巾眉深まぶかき」ただ七字、あやせば笑う声聞ゆ。

足袋の真結びまむす、これをも俳句の材料にせんとは誰か思わん。我この句を見ること熟せり、しかもいかにしてこのことを捉え得たるかは今に怪しまざるを得ず。

「齒あらはに」齒にしみ入るつめたさ想いやるべし。

用語

蕪村の俳句における意匠の美はすでにこれを言えり。意匠の美は文学の根本にして人を感動せしむるの力また多くここにあり。しかれども用語、句法の美これに伴わざらんには、あたら意匠の美を活動せしめざるのみならず、かえつてその意匠に一種厭いとうべ

き俗気を帯びたるがごとく感ぜしむることあり。蕪村の用語と句法とはその意匠を現わすに最も適せるものにして、しかも自己の創体に属するもの多し。その用語の概略を言わんに

(一) 漢語 は蕪村の喜んで用いたるものにして、あるいは漢語多きをもつて蕪村の唯一の特色と誤認せらるるに至る。この一事がいかに人の注意を惹ひきしかを知るべし。蕪村が漢語を用いたるは種々の便利ありしに因るべけれど、第一に漢語が国語より簡短なりしに因らずんばあらず、複雑なる意匠を十七、八字の中に含めんには簡短なる漢語の必要あり。また簡短なる語を用うれば叙事形容を精細になし得べき利あり。

指。南。車。を。胡。地。に。引。き。去。る。か。す。み。か。な

閣に坐して遠き蛙かはづを聞く夜かな

祇や鑑ひげや髭ひげに落花ひねを捻りけり

鮓すし桶をけをこれへと樹下の床しやうぎ几ぎかな

三井寺や日は午に逼るわかかへで若楓

柚ゆの花や善き酒蔵へいす堀いの内

耳目肺腸こゝに玉巻く芭蕉庵

採蓐おにつらをうたふ彦根の※かな

鬼貫おにつらや新酒の中の貧おに処す

月天心貧おしき町を通りけり

秋風や酒肆おに詩うたふ漁者お樵者お

雁鳴くや舟に魚焼く琵琶湖上

のごときこの例なり。されども漢語の必要ありとのみにてみだりに漢語を用い、ために一句の調和を欠かば佳句とは言われじ。

「胡地」の語のごときあまり耳遠く普通に用いるべきにはあらざるを、「指南車」の語上にあり、「引き去る」という漢文直訳風の語下にあるために一句の調和を得たるなり。「落花」の語は「祇や鑑や」に対して響きよく、「芭蕉庵」という語なくんば「耳目肺腸」とは置く能わ^{あた}ず。「採^{さい}蓴^{じゆん}」は漢語にあらざれば言うべからず、さりとしてこの語ばかりにては国語と調和せず。ゆえにことさらに「儻夫^{さうふ}」とは受けた^らり。

第二は国語にて言い得ざるにはあらねど、漢語を用いる方よくその意匠を現わすべき場合なり。漢語を用いて勢いを強くしたる

句、

五月雨や大河を前に家二軒

夕立や筆も乾かず一千言

時鳥平安城をすぢかひに

絶頂の城たのもしき若葉かな

方百里雨雲よせぬ牡丹かな

「おおかわ」と言えば水勢ぬるく「たいか」と言えば水勢急に感
 ぜられ、「いただき」と言えば山嶮けわしからず、「ぜつちよう」と
 言えば山嶮しく感ぜらる。

漢語を用いていかめしくしたる句

蚊遣かやりしてまゐらす僧の座右かな

売こト先生木の下したやみ 闇の訪はれ顔

「座右」の語は僧に対する多少の尊敬を表わし、「売ばいト先生ぼくせんせい」
 と言えは「ト屋算うらやさん」と言いしよりも鹿しか爪つめらしく聞えてよく
 「訪はれ顔」に響けり。

寂として客の絶間の牡丹かな

蕭条として石に日の入る枯野かな

のごときは「しんとして」「淋しさは」など置きたると大差なけれど、なお漢語の方適切なるべし。

第三は支那の成語を用うるものにして、こは成語を用いたるがために興あるもの、または成語をそのままならでは用いるべからざるものあり。支那の人名地名を用い、支那の古事風景等を詠ず

る場合はもちろん、わが国のことをいう引合いに出されたるも少
からず。その句、

行。き。く。て。こ。ゝ。に。行。き。行。く。夏。野。か。な

朝霧や杭くひせ打つ音丁々たり

帛びはを裂く琵琶の流れや秋の声

釣り上げし鱸すずきの巨口玉や吐く

三径の十歩に尽きて蓼たでの花

冬ふゆごも籠り燈下に書すと書かれたり

侘わびぜんじ禅師から鮭あじに白頭の吟を彫る

秋風の呉人は知らじふぐと汁

右三種類のほかに

春しゅん水すゐや四條五條の橋の下

の句は「春の水」ともあるべきを「橋の下」と同調になりて耳ざわりなれば「春水」とは置いたるならん。ただし四條五條という漢音の語なくば「春水」とは言わざりけん。

蚊帳かや釣りて翠微すゐつくらん家の内

特に翠微すゐびというは翠の字を蚊帳の色にかけたるしやれなり。

薰風いんぷうやともしたてかねつ巖いづくしま島

「風薰る」とは俳句の普通に用いるところなれどしか言いては

「薰る」の意強くなりて句を成しがたし。ただ夏の風というくらの意に用いるものなれば「薰風」とつづけて一種の風の名となすにしかず。けだし蕪村の爛眼けいがんは早くこれに注意したるものな

るべし。

(二) 古語 もまた蕪村の好んで用いたるものなり。漢語は延えんぼ

宝、天和てんなの間其角一派が濫用してついにその調和を得ず、其角

すらこれより後、また用いざりしもの、蕪村に至りてはじめて成功を得たり。古語は元禄時代にありて芭蕉一派が常語との調和を試み十分に成功したるもの、今は蕪村に因つてさらに一步を進められぬ。

およぐ時よるべなきさまの蛙かな

命婦より牡丹餅たばす彼岸かな

更ころもがへ衣母なん藤原氏なりけり

真しらけのよね一升や鮓のめし

おろしおく筈おひになるふる夏野かな

夕顔や黄に咲いたるもあるべかり

夜を寒み小冠者臥したり北枕

高燈籠たかどうろ消えなんとするあまたゝび

渡り鳥雲のはたての錦かな

大高に君しろしめせ今年米

蕪村の用いたる古語には藤原時代のもあらん、北条足利時代の
もあらん、あるいは漢書の訳読に用いられたるすなわち漢語化せ
られたる古語も多からん。いづれにもせよ、今まで俳句界に入ら
ざりし古語を手に従つて拈ねん出しゅつしたるは蕪村の力なり。ただ漢
語を用い、いたずらに佶屈の句を作り、もつて蕪村の真髓を得た

りとなすもの、いまだ他の半面を解せざるべし。

(三) 俗語 の最俗なるものを用い初めたるもまた蕪村なり。元禄時代に雅語、俗語相半ばせし俳句も、享保以後無学無識の徒にがんろう 翫 弄せらるるに至つて雅語ようやく消滅し俗語ますます用いられ、意匠の野卑と相待つて純然たる俗俳句となり了おわれり、されどその俗語も必ずしも好んで俗語を用いしにあらで、雅語を解せざるがため知らず知らず卑近に流れたるもの、ゆえに彼らが用いる俗語は俗語中いにしえのなるべく古に近きをえらみたりとおぼしく、俗中の俗なる日常の話語に至りてはもとより用いざりしのみならず、彼らなおこれを俗として排斥したり。檀林派の作者といえどもその意匠句法の滑稽突とつてい梯なるにかかわらず、またこの俗語中の俗語

を用いたるものを見ず。蕉門も檀林も其嵐派きらんぱも支麦派も用いるに難かたんじたる極端の俗語を取つて平氣に俳句中に挿入したる蕪村の技ぎりよう倆は実に測るべからざるものあり。しかもその俗語の俗ならずしてかえつて活動する、腐草螢ほたると化し淤泥蓮おではちすを生ずるの趣あるを見ては誰かその奇術に驚かざらん。

出る杭くひを打たうとしたりや柳かな

酒を煮る家の女房ちよとほれた

絵団扇えうちほのそれも清十郎せいじふろにお夏かな

蚊帳の内に螢放してア、樂や

杜かきつばた若とびべたりと鳶とびのたれてける

葉喰隣くすりひの亭主箸持参

化さうな傘かす寺の時雨しぐれかな

後世いっさ一茶の俗語を用いたる、あるいはこれらの句より胚胎はいたいし
 来たれるにはあらざるか。薬喰の句は蕪村集中の最俗なるもの、
 一読に堪えずといえども、一茶はことにこの辺より悟入したるか
 の感なきにあらず。けだし一茶の作時ときに名句なきにはあらざるも、
 全体を通じて言えば句法において蕪村の「酒を煮る」「絵団扇」
 のごときしまりなく、意匠において「杜若」「時雨」のごとき趣
 味を欠きたり。蕪村は漢語をも古語をも極端に用いたり。佶屈な
 りやすき漢語も佶屈ならしめざりき。冗漫なりやすき古語も冗漫
 ならしめざりき。野卑なりやすき俗語も野卑ならしめざりき。俗
 語を用いたる一茶のほかは漢語にも古語にも彼は匹敵者を有せざ

りき。用語の一点においても蕪村は俳句界独歩の人なり。

句法

句法は言語の接続をいう。俳句の句法は貞享じょうきょう、元禄に定まりて享保、宝暦を経て少しも動かず。むしろ元禄に変化したるだけの變化さえ失い、「何や」「何かな」一天張りのきわめて単調なるものとなり了りて、ただ時に檀林一派及び鬼貫らの奇を弄ろうするあるのみ。この際に当りて蕪村は句法の上に種々工夫を試み、あるいは漢詩的に、あるいは古文的に、古人のいまだかつて作らざりしものを数多あまた造り出せり。

春雨やいざよふ月の海半ななかば

春風や堤長うして家遠し

雉打きじて帰る家路の日は高し

玉川に高野かうやの花や流れ去る

祇や鑑や髭に落花をひねりけり

桜狩美人の腹や減却す

出いづべくとして出ずなりぬ梅の宿

菜の花や月は東に日は西に

裏門の寺に逢ほうちやく著よもぎす蓬かな

山彦の南はいづち春の暮

月に対す君に投網とあみの水煙

掛かけ香かうや唾おしの娘の人となり

鮓おをお圧おす石上に詩を題すべく

夏山や京尽し飛ぶ鷺さぎ一つ

浅川の西し東す若葉かな

ふもと麓なる我蕎麦存す野分かな

蘭らん夕ふ狐べのくれし奇楠きやんをたか炷たかん

漁家寒し酒かしらに頭かしらの雪を焼く

頭巾二つ一つは人に参らせん

我も死して碑にほとりせん枯尾花
(蕉翁碑)

のごときは漢文より来たりし句法なり。蕪村最も多くこの種の句

法をなす。

しのゝめや鵜うをのがれたる魚浅し

鮓桶を洗へば浅き遊魚かな

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音暗し

魚浅し、音暗しなどいえる警語を用いたるは漢詩より得たるものならん。従来の国文いまだこの種の工夫なし。

陽かげろふ炎や名も知らぬ虫の白き飛ぶ

橋なくて日暮れんとする春の水

罌粟けしの花まがきすべくもあらぬかな

のごときは古文より来たるもの、

春の水背戸せどに田つくらんとぞ思ふ

白びやくれん蓮れんを剪きらんとぞ思ふ僧のさま

この「とぞ思ふ」というは和歌より取り来たりしものなり。そのほか

衣がへ野路の人はつかに白し

蚊の声す忍にんどう冬の花散るたびに

水かれ／＼たで蓼かあらぬか蕎麦か否か

のごときあり。

元禄以来形容語はきわめて必要なもののほか俳句には用いられざりき。いたずらに場所塞ふさぎをなすのみにて、ありてもなくても意義に大差なしとの意なりしならん。しかれども形容語は句を活動せしめ印象を明瞭ならしむるにはこれを用いて効多し。蕪村は巧みにこれを用い、ことに中七音のうちに簡単なる形容を用う

ること長じたり。

水の粉やあるじかしこき後家の君

尼寺や善き蚊帳垂るゝ宵月夜

柚ゆの花や能酒蔵ざうす塀の内

手燭てしよくして善き蒲団出す夜寒かな

緑子の頭巾眉深きいとほしみ

真結びの足袋はしたなき給仕かな

宿かへて火燧こたつ嬉しき在ありどころ処

後の形容詞を用いる者、多くは句勢にたるみを生じてかえつて一句の病となる。蕪村の簡かん勁けいと適切とに及ばざる遠し。

蕪村の句は堅くしまりて揺うごかぬがその特色なり。ゆえに無形の

語少く有形の語多し。簡勁の語多く冗漫の語少し。しかるに彼に一つの癖^{へき}ありてある形容詞に限り長きを厭わず、しばしばこれを句尾に置く。

つゝじ咲^{さい}て石うつしたる嬉しきよ

更^{ころもがへ}衣^{やせ} 八瀬の里人ゆかしきよ

顔白き子のうれしきよ 枕蚊帳^{まくらがや}

五月雨大井越えたるかしこきよ^{さつきあめ}

夏川を越す嬉しきよ手に草履

小鳥来る音嬉しきよ 板^{いた}庇^{びさし}

鋸^{のこぎり}の音貧しきよ夜半の冬

のごときこれなり。普通に嬉しと思う時嬉しと言わば俳句は無味

になり了らん、まして嬉しさよと長く言わんはなおさらのことなり。嬉しさよといわねば感情を現わす能わざる時にのみ用いたる蕪村の句は、もとよりこの語を無造作に置きたるにあらず。さらに驚くべきは蕪村が一句の結尾に「に」という手爾葉てにはを用いたることなり。例えば

帰る雁田毎かりたごとの月の曇る夜に

菜の花や月は東に日は西に

春の夜や宵曙よあけほのの其中に

畑打や鳥さへ鳴かぬ山陰に

時ほととぎす鳥 平安城をすぢかひに

蚊の声す忍冬の花散るたびに

広庭の牡丹や天の一方に

庵いほの月あるじを問へば芋掘りに

狐火や鬮どくろに雨のたまる夜に

常人をしてこの句法に倣ならわしめば必ずや失敗に終らん、手爾葉の結尾をもつて一句を操るもの、蕪村の蕪村たるゆえんなり。

蕪村は下五文字に何ぶり、何がち、何顔、何心のごとき語を据すうることを好めり。

三椀ざんの雑煮ざいかにかふるや長者ぶり

少年の矢数問ひよる念者ぶり

鶯のあちこちとするや小家こいへがち

小豆あづき売る小家の梅つぼみの蒼がち

耕すや五石の粟あはのあるじ顔

つばくら燕や水田の風に吹かれ顔

川狩や楼上の人の見知り顔

売卜先生木の下闇の訪はれ顔

行く春やおもたきびは琵琶の抱き心

夕顔の花嚙む猫やよそ心

せきばく寂寞と昼間をすし鮓のな馴れ加減

またこの類の語の中七字に用いられたるもあり。後世の俗俳家
何心、何ぶりなどと詠ずる者多くは卑俗厭うべし。

なれすぎた鮓うらみをあるじの遺恨かな

牡丹ある寺行き過ぎし恨かな

葛^{くず}を得て清水に遠き恨かな

「恨かな」というも漢詩より来たりしものならん。

句調

蕪村以前の俳句は五七五の句切^{くぎれ}にて意味も切れたるが多し。た

またま変例と見るべきものもなお

行春^{ゆく}や鳥啼^なき魚^{うを}の目は涙 芭蕉

松風の落葉か水の音涼し 同

松杉をほめてや風の薫る音 同

のごときものにして多くは「や」「か」等の切字^{きれじ}を含み、しから

ざるも七音の句必ず四三または三四と切れたるを見る。蕪村の句には

夕風や水青鷺の脛を打つ

鮓を圧す我れ酒釀かもす隣あり

宮城野みやぎのの萩更さらしな科の蕎麦にいづれ

のごとく二五と切れたるあり、

若葉して水白く麦黄ばみたり

柳散り清水か涸れ石ところ／＼

春雨や人住みて煙壁を漏る

のごとく五二または五三と切れたるもあり。これ恐らくは蕪村のはじ創めたるもの、ぎようたい暁台、らんこう闌更によりて盛んに用いられたるに

やあらん。

句調は五七五調のほか、時に長句をなし、時に異調をなす、六七五調は五七五調に次ぎて多く用いられたり。

花を踏みし草履も見えて朝寐あさねかな

妹が垣根三味線草の花咲きぬ

卯月うづき八日死んで生るゝ子は仏

閑古鳥かんこどりかいさゝか白き鳥飛びぬ

虫のためにそこなはれ落つ柿の花

恋さま／＼願の糸も白きより

月天心貧しき町を通りけり

羽蟻はあり飛ぶや富士の裾野の小家より

七七五調、八七五調、九七五調の句

独鈷鎌首水かけ論の蛙かなどくこ

売卜先生木の下闇の訪はれ顔

花散り月落ちて文こゝにあら有難や

立ち去る事一里眉毛びまうに秋の峰寒し

門前の老婆子薪たきぎ貪ごぼる野分かな

夜桃林を出で、暁嵯峨さがの桜人

五八五調、五九五調、五十五調の句

およぐ時よるべなきさまの蛙かな

おもかげもかはらけく年の市

秋雨や水底の草を踏わたみ渉る

茯ぶくりやう 苓しやうろは伏かくれ松露はあらはれぬ

侘からぎけ禪師乾あゑる鮭に白頭の吟を彫

五七六調、五八六調、六七六調、六八六調等にて終六言を

夕立や筆も乾かず一千言

ほうたんやしろかねの猫こかねの蝶

心ところてん 太さかしまに銀河三千尺

炭たどん団法師火桶の穴より覗うかがひけり

のごとく置きたるは古来例に乏しからず。終六言を三三調に用いたるは蕪村の創意にやあらん。その例、

嵯峨へ帰る人はいづこの花に暮れし

一行の雁かりや端山に月を印す

朝顔や手拭の端の藍をかこつ

水かれ／＼^た、^で蓼かあらぬか蕎麦か否か

柳散り清水涸れ石とこころ／＼

我をいとふ隣家寒夜に鍋をならす

霜百里舟中に我月を領す

そのほか調子のいたく異なりたるものあり。

梅遠^{をちこち}近南すべく北すべく

閑古鳥寺見ゆ^{ぼくりんじ}麦林寺とやいふ

山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

更衣母なん藤原氏なりけり

最も奇なるは

をちこちをちこちと打つ砧きぬたかな

の句の字は十六にして調子は五七五調に吟じ得べきがごとき。

文法

漢語、俗語、雅語のことは前にも言えり。その他動詞、助動詞、形容詞にも蕪村ならではの用いざる語あり。

鮓すしを圧す石上に詩を題すべく。

緑子の頭巾まぶか眉深まぶかきいとほしみ。

大矢おほやかず数弓師親子も参りたる。

時鳥歌よむ遊女聞ゆなる。

麻刈れと夕日此このごろ頃斜なる。

「たり」「なり」と言わずして「たる」「なる」と言うがごとき、「べし」と言わずして「べく」と言うがごとき、「いとほし」と言わずして「いとほしみ」と言うがごとき、蕪村の故意に用いたるものとおぼし。前人の句またこの語を用いたるものなきにあらねど、それは終止言として用いたるが多きように見ゆ。蕪村のはこときさらに終止言ならぬ語を用いて余意を永くしたるなるべし。

をさな子の寺なつかしむい銀杏てふかな

「なつかしむ」という動詞を用いたる例ありや否や知らず。あるいは思う、「なつかし」という形容詞を転じて蕪村の創造したる動詞にはあらざるか。はたしてしかりとすれば蕪村は傍若無人の

振舞いをなしたる者と謂うべし。しかれども百年後の今日に至りこの語を襲用するもの続々として出でんか、蕪村の造語はついに字彙中の一隅を占むるの時あらんも測りがたし。英雄の事業時にかくのごときものあり。

蕪村は古文法など知らざりけん、よし知りたりともそれにかかわらざりけん、文法に違たがいたる句

更衣母なん藤原氏なりけり
のごときあり。

我宿にいかに引くべき清水かな

のごとく「いかに」「何」等の係りを「かな」と結びたるは蕪村以外にも多し。

だいもんじあふみ
大文字近江の空もたゞならね

の「ね」のごとき例も他になきにあらず、蕪村は終止言としてこれをを用いたるか、あるいは前に挙げたる「たる」「なる」のごとく特に言い残したる語なるか。たとい後者なりとも文法学者をして言わしめば文法に違いたりとせん、はたして文法に違いりや、はた韻文の文法も散文のごとくならざるべからざるか、そは大いに研究を要すべき問題なり。余は文法論につきてなお幾多の疑いを存する者なれども、これらの俳句をことごとく文法に違えりとして排斥する説には反対する者なり。まして普通の場合に「ならめ」等の結語を用いる例は万葉にもあるをや。

ふたもと
一一本の梅に遅速を愛すかな

麓なる我蕎麦存す野分かな

の「愛すかな」「存す野分」の連続のごとき

夏山や京尽し飛ぶ鷺一つ

の「京尽し飛ぶ」の連続のごとき

^{らゆふべ}蘭夕狐のくれし奇楠^{きやら}を炷^{たか}ん

の「蘭夕」の連続のごとき漢文より来たりしものは従来の国語になき句法を用いたり。これらはもとより故意にこの新句法を造りしもの、しかしして明治の俳句界に一生面を開きしものまた多くこの辺より出づ。

材料

蕪村は狐狸怪をなすことを信じたるか、たとい信ぜざるもこの種の談を聞くことを好みしか、彼の自筆の草稿新花摘しんはなつみは怪談を載すること多く、かつ彼の句にも狐狸を詠じたるもの少からず。

公達きんだちに狐きつねばけたり宵の春

飯盗む狐追ふ声や麦の秋

狐火やいづこ河内かはちの麦畠

麦むぎあき秋や狐ののかぬ小百姓

秋の暮ぼけ仏に化たぬきる狸かな

戸たを叩く狸と秋を惜みけり

石を打狐守もる夜の砧かな

蘭夕狐のくれし奇楠きやうを炷たかん

小狐の何にむせけん小萩原

小狐の隠れ顔なる野菊かな

狐火の燃えつくばかり枯尾花

草枯れて狐の飛ひきやく脚通りけり

水仙に狐遊ぶや宵月夜

怪異を詠みたるもの、

化ばけさうな傘かさかす寺の時雨しぐれかな

西の京にばけもの栖すみて久しくあれ果はてたる家ありけり今は

其さたなくて

春雨や人住みて煙壁を洩るも

狐狸にはあらで幾いくばく何か怪異の聯想を起すべき動物を詠みたる

もの、

獺をその住む水も田に引く早苗かな

獺を打し翁も誘ふ田植かな

河童の恋する宿や夏の月

蝮くちばみの躰びきも合ねむ歡の葉陰かな

麦秋や鼬いたち啼なくなる長をさがもと

黄昏たそがれや萩いたちに鼬いたちの高台寺

むさゝびの小鳥は喰をみ居をる枯野かな

このほか犬鼠などの句多し。そは怪異というにあらねどかくのごとき動物を好んで材料に用いたるもその特色の一なり。

州名国名など広き地名を多く用いたり。些ささい細なることなれど蕪村以前にはこの例少かりしにや。

河内路かはちぢや東風こち吹き送る巫女が袖

雉鳴きぎすくや草の武蔵むさしの八平氏

三河なる八橋も近き田植かな

楊州の津も見えそめて雲の峰

夏山や通ひなれたる若狭わかさび人

狐火やいづこ河内の麦畠

しのゝめや露あふみを近江の麻畠

はつしほ
初汐や朝日の中に伊豆相模

だいもじ
大文字や近江の空もたゞならね

稲妻の一網打つや伊勢の海

きのぢ
紀路にも下りず夜を行く雁一つ

こぢやうちん
虫鳴くや河内通ひの小提灯

糞、尿、屁など多く用いたるは其角なり。其角の句はやや奇を求めてことさらにもせしがごとく思わる。蕪村はこれを巧みに用い、これら不浄の物をして殺風景ならしめざるのみならず、幾多の荒寒凄涼なる趣味を含ましむるを得たり。

だい
大とこの糞ひりおはす枯野かな

いばりせし蒲団干したり須磨の里

糞一つ鼠のこぼす衾ふすまかな

杜かきつばた若とびべたりと鳶とびのたれてける

蕪村はこれら糞尿のごとき材料を取ると同時にまた上流社会の
やさしく美しき様をも巧みに詠み出でたり。

春の夜に尊もき御所もるを守身もるかな

春惜ざすむ座主ざすの連歌に召よされけり

命婦ぼたもちより牡丹餅ぼたもちたばす彼岸かな

滝口に灯を呼ぶ声や春の雨

よき人を宿す小家や朧月

小冠こくわじや者とが出て花見る人を咎とがめけり

短夜いとまや暇賜いとまはる白拍子

葛水や入江の御所に詣づれば

稲葉殿の御茶たぶ夜なり時鳥

時鳥琥珀こはくの玉を鳴らし行く

狩かりぎぬ衣の袖の裏は這ほふ螢たるとかな

袖笠に毛虫をしのぶふるごたち古御達

名月や秋月どのふなよそひ、艤

蕪村の句新奇ならざるものなければ新奇をもって論ずれば蕪村句集全部を見るの完全なるにしかず。かつ初めより諸種の例に引きたる句多く新奇なるをもって特にここに拳ぐるの要なしといえども、前に挙げざりし句の中に新奇なる材料を用いし句を少し記しておくべし。

野袴の法師が旅や春の風

陽かげろふ炎あじかや簀あじかに土をめつる人

奈良道やたうきばたけ当帰たうき島ばたけの花ひとき一木

畑打や法三章の札のもと

巫女町によき衣すます卯月かな

更衣いんろう印いんろう籠いんろう買いんろうひに所しよけ化しよけ二人

床ゆか涼ゆかみ笠かさき著かさき連歌ゆかの戻りかな

秋立つやさゆんば白湯さゆんば香さゆんばしき施薬院

秋立つや何に驚くおんやうじ陰陽師

甲賀衆かふがしゆのしのびの賭かけや夜半の秋

いでさらばとうこ投壺とうこ参らせん菊の花

易水に根深ねぶか流るゝ寒さかな

飛騨山ひだやまの質屋鎖とぎしぬ夜半の冬

乾鮭からざけや帯刀殿たてわきどのの台所

これらの材料は蕪村以前の句に少きのみならず、蕪村以後もまた用いる能わざりき。

縁語及び譬喩

蕪村が縁語その他文字上の遊戯を主としたる俳句をつくりしは怪しむべきようなれど、その句の巧妙にして斧鑿ふさくの痕あとを留めず、かつ和歌もしくは檀林、支麦のごとき没趣味の作をなさざるところ

ろ、
 またもつてその技倆を窺うに足る。
 縁語を用いたる句、

春雨や身にふる頭巾著たりけり

つかみ取て心の闇の螢哉

半日の閑を榎や蝉の声

出代や春さめ／＼と古葛籠

近道へ出てうれし野のつゝじかな

愚痴無智のあま酒つくる松が岡

蝸牛や其角文字のにじり書

橘のかはたれ時や古館

橘のかごとがましき裕かな

一八やしやが父に似てしやがの花

夏山や神の名はいさしらにぎて

藻の花やかたわれからの月もすむ

忘るなよ程は雲助時鳥

角文字つのもじのいざ月もよし牛祭

又嘘うそを月夜かまに釜しぐれかなの時雨哉

葛くずの葉のうらみ顔なる細雨かな

頭巾著て声こもりくの初瀬法師

晋子三十三回忌辰

搯すりぼん盆のみそみめぐりや寺の霜

または

題白川

黒谷の隣は白し蕎麦の花

のごとき固有名詞をもじりたるもあり。または

短夜や八声の鳥は八ツに啼く

ぶくりやう

茯苓はは伏しかくれ松露しよろろは露れぬ

思古人移竹

去来去り移竹移りぬ幾秋ぞ

のごとく文字を重ねかけたるもあり。

俳句に譬喩ひゆを用いるもの、俗人の好むところにしてその句多く

理窟おに墮ち趣味を没す。蕪村の句時に譬喩を用いるものありとい

えども、譬喩奇抜にして多少の雅致そなを具う。また支麦輩むの夢寐むに

も知らざるところなり。

独鈷鎌首水かけ論の蛙かなどくこ

苗代の色紙に遊ぶ蛙かな

ところてん

心 太さかしまに銀河三千尺

夕顔のそれは髑髏かどくろ 鉢叩はちたたき

蝸牛の住はてし宿やうつせ貝

金扇に卯花画

白かねの卯花もさくや井出の里

をしどり

鴛鴦や国師の杳も錦革くつ

あたまから蒲団かぶれば海鼠かななまこ

水仙や鴟もずの草茎花咲きぬ

ある隠士のもとにて

古庭に茶筌ちやせん花ばな咲く椿かな

雁宕久しく音づれせざりければ

有と見えて扇の裏絵おぼつか覚束あつな

波翻舌本吐紅蓮

閻王えんわうの口や牡丹を吐かんとす

蟻垤

蟻王ぎわう宮朱門を開く牡丹かな

浪花の旧国主して諸国の俳士を集めて円山に会筵しける
時

うきくさ
 萍を吹き集めてや 花はなむしろ筵

傲素堂

乾鮭や琴に斧をのうつ響あり

時代

蕪村は享保元年に生まれて天明三年に歿す。六十八の長寿を保ちしかばその間種々の経歴もありしなるべけれど、大体の上より観みれば文学美術の衰えんとする時代に生まれてその盛んならんとする時代に歿せしなり。俳句は享保に至りて芭蕉門の英俊多くは死し、支考、乙おつゆう由らがざんぜん残喘ぜんを保ちてますます俗に墮おつるある

のみ。明和以後枯楊こようげつを生じてようやく春風に吹かれたる俳句は天明に至りてその盛を極きわむ。俳句界二百年間元禄と天明とを最盛の時期とす。元禄の盛運は芭蕉を中心として成りしもの、蕪村の天明におけるは芭蕉の元禄におけるがごとくならざりしといえども、天明の隆盛を来たせしものその力最も多きにおる。天明の余勢は寛政、文化に及んで漸次に衰え、文政以後また痕迹こんせきを留めず。

和歌は万葉以来、新古今以来、一時代を經ふるごとに一段の墮落をなしたるもの、真淵出まぶちでわずかにこれを挽回したり。真淵歿せしは蕪村五十四歳の時、ほぼその時を同じゆうしたれば、和歌にして取るべくは蕪村はこれを取るに躡ちゆうちよ躡ちよせざりしならん。さ

れど蕪村の句その影響を受けしとも見えざるは、音調に泥なすみて清新なる趣味を欠ける和歌の到底俳句を利するに足らざりしや必せり。

当時の和文なるものは多く擬古文の類にして見るべきなかりしも、擬古といふことはあるいは蕪村をして古語を用い古代の有様を詠ぜしめたる原因となりしかも知らず。しかして蕪村はこの材料を古物語等より取りしと覚ゆ。

蕪村が最も多く時代の影響を受けしは漢学ことに漢詩そついなりき。かつ漢学は蕪村が少年の時にむしろ隆盛を極め、徂徠一派は勃興したるなり。蕪村は十分に徂徠の説を利用し、もつて腐敗せる俳句に新生命を与えたるを見る。蕪村は徂徠ら修辭派の主張する、

文は漢以上、詩は唐以上と言えるがごとき僻説へきせつには同意するものにあらざるべけれど、唐以上の詩をもつて粹の粹となしたるものと疑いあらじ。蕪村が書ける春泥集しゅんでいしゅうの序の中に曰く、

(略) 彼も知らず、我も知らず、自然に化して俗を離るるの捷し徑ようけいありや、こたえて曰く、詩を語るべし、子もとより詩を能くす、他に求むべからず、波疑はつて敢あえて問う、それ詩と俳諧といささかその致ちを異にす、さるを俳諧を捨てて詩を語れと云う迂遠うえんなるにあらずや、答えて曰く(略) 画の俗を去るだにも筆を投じて書を読ましむ、いわんや詩と俳諧と何の遠しとすることあらんや(略)

(略) 詩に李杜りとを貴ぶに論なし、なお元白げんぱくを捨てざるがごと

くせよ（略）

これを読まば蕪村が漢詩の趣味を俳句に遷ししことも、李杜を貴び元白を賤しいやしみしことも明瞭ならん。漢書は蕪村の愛読せしところ、その詩を解すること深く、芭蕉がきわめておぼろに杜甫の詩想を認めしとは異なりしなるべし。

絵画の上よりいうも蕪村は衰運の極に生まれて盛んならんとし、て歿せしなり。蕪村はみずから画を造りしこと多く、南宗の画家として大雅と並称せらる。天明以後絵画にわかに勃興して美術史に一紀元を与えたることにつきて、蕪村もまた多少の原因をなさざりしにはあらざるも、その影響はきわめて微弱にして、彼が俳句界における関係と同日に論ずべきにあらず。

天明は狂歌盛んに行われ、黄表紙ようやく勢いを得たる時なり。されど俳句とは直接に關係するところなし。ただこの時代が文学美術全般の勃興を成したるは文運の隆盛を促すべき大勢に驅られたるものにして、その大勢なるものはかえつて各種の文学美術が相互に影響したる結果も多かりけん。

蕪村の交わりし俳人は太祇たいぎ、蓼太りょうた、暁台ぎょうたいらにしてそのう

ち暁台は蕪村に擬したりとおぼしく、蓼太は時々ひそかに蕪村調を学びしこともあるべしといえども、太祇に至りては蕪村を導きしか、蕪村に導かれしか、今これを判するを得ず。とにかくに蕪村が幾分か太祇に導かれし部分もあり得べきを信ずるなり。しかれども彼が師巴人はじんに受くるところ多からざりしは、成功の晩年に

ありしを見て知るべし。

履歴性行等

蕪村は摂津浪花なにわに近き毛馬塘けまづつみの片ほとりに幼時を送りしこと
 その春風馬堤しゅんぷうばて曲いきよくに見ゆ。彼は某に与うる書中にこの曲のこ
 とを記して

馬堤は毛馬塘なり、すなわち余が故園なり

といえり。やや長じて東都に遊び、巴人の門に入りて俳諧を学ぶ。
 夜半亭やはんていは師の名を継げるなり。宝曆のころなりけん、京に帰り
 て俳諧ようやく神に入る。蕪村もと名利を厭いとい聞達を求めず、し

かれども俳人として彼が名誉は次第に四方雅客の間に伝称せらるるに至りたり。天明三年十二月二十四日夜歿し、なきがら亡骸は洛東らくとう金福寺に葬る。享年六十八。

蕪村は総常両毛奥羽など遊歴せしかども紀行なるものを作らず。またその地に関する俳句も多からず。西帰の後丹後におること三年、因つて谷口氏を改めて与謝よさとす。彼は讃州に遊びしこともありけん、句集に見えたり。また巖いづくしま島の句あるを見るにこの地の風情ふせい写し得て最も妙なり、空想の及ぶべきにあらず。蕪村あるいはここにも遊べるか。蕪村は読書を好み和漢の書何くれとなくあさりしも字句の間には眼もとめず、ただ大体の趣味を翫味がんみして満足したりしがごとし。俳句に古語古事を用いること、蕪村集の

ごとく多きは他にその例を見ず。

彼が字句にかかわらざりしは古文法を守らず、仮名遣いに注意せざりしことにもしるけれど、なおその他にしか思われるところ多し。一例を挙げれば彼が自筆の新花摘に

射干しゃかんしてささや咄く近江やわたかな

とあり。射干しゃかんは「ひおうぎ」「からすおうぎ」などいえる花草にして、ここは「照射ともしして」の誤なるべし。蕪村が照射と射干との区別を知らざるはずはなけれど、かかることに無頓着さがの性として氣のつかざりしものならん。近江も大身と書くべきにや。秀吉が奥州を「大しゆ」と書きしことさえ思い出されてなつかし、蕪村の磊落らいらくにして法度に拘泥せざりしことこの類なり。彼は俳人が

家集を出版することをさえ厭えり。彼の心性高潔にして些さの俗気なきこともつて見るべし。しかれども余は磊落高潔なる蕪村を尊敬すると同時に、小心ならざりし、あまり名誉心を抑え過ぎたる蕪村を惜しまずんばあらず。蕪村をして名を文学に揚げ誉を百代に残さんとの些の野心あらしめば、彼の事業はここに止まらざりしや必せり。彼は恐らくは一俳人に満足せざりしならん。春風馬堤曲に溢れたる詩思の富贍ふせんにして情緒の纏綿てんめんせるを見るに、七字中に屈すべき文学者にはあらざりしなり。彼はその余勢をもつて絵事を試みしかども大成するに至らざりき。もし彼をして力を俳画に伸ばさしめば日本画の上に一生面を開き得たるべく、応挙輩をして名をほしいままにせしめざりしものを、彼はそれをも

得なさざりき。余は日本の美術文学のために惜しむ。

春風馬堤曲とは俳句やら漢詩やら何やら交まぜこぜにものしたる蕪村の長篇にして、蕪村を見るにはこよなく便となるものなり。

俳句以外に蕪村の文学として見るべきものもこれのみ。蕪村の熱情を現わしたるものもこれのみ。春風馬堤曲とは支那の曲名を真似たるものにて、そのかく名づけしゆえんは蕪村の書簡つまびに詳らかなり。書簡に曰く

一春風馬堤曲馬堤は毛馬塘なりすなわち余が故園なり

余幼童之時春色清和の日には必ず友どちとこの堤上にのぼりて遊び候水には上下の船あり堤には往来の客ありその中には田舎娘の浪花に奉公してかしこく浪花の時勢粧ならに倣い髪かたちも妓

家の風情をまなび〇伝しげ太夫の心中のうき名をうらやみ故郷
 の兄弟を恥じいやしむ者ありされどもさすがこえんのじよう故園情に堪え
 ずたまたま親里に帰省するあだ者なるべし浪花を出てより親里
 までの道行にて引道具の狂言座元夜半亭と御笑い下さるべく候
 実は愚老懐旧のやるかたなきよりうめき出たる実情にて候

代女じよにかわつてころをのぶ述意なにはと称する春風馬堤曲十八首に曰く

やぶ入や浪花なにはを出て長柄川ながらがは

春風や堤長うして家遠し

堤下摘芳草ていかはうさうをつむ 荆けい与ときよく棘とみちをふさぐ塞路さき

荆けいきよく棘なんぞ何つれなきや無なきや情なきや 裂くんをさき裙かつこを且きずつく傷きずつく股きずつく

溪流石点々けいりういしてん 踏いしをふんで石かうきんをとる撮かうきんをとる香か芹せりん

たしやすすぬじやうのいし
 多謝水上石
われにくんをうるほさざるををしふるを
 教儂不沾裙

一軒の茶店の柳老おいにけり

茶店の老婆子儂われを見て 慇懃いんぎんに無恙むやうを賀し且儂われが春衣しゅんいを美ほ

む

てんちうにかくあり

店中有二客

よくかうなんのごをかいす
 能解江南語

しゆせんさんびんをなげうち
 酒錢擲二三緡

われをむかへたふをゆづりてさる
 迎我讓榻去

古駅三両家猫兒妻べうじを呼妻よぶ来らず

ひなをよぶりぐわいのとり

呼雛籬外雞

りぐわいくさちのみつ
 籬外草滿地

ひなとびてりをこえんとほつす
 雛飛欲越籬

りたかうしてしたがふさんし
 籬高随三四

春草路三叉中さんさに捷徑あり我を迎ふ

たんぽゝ花咲り三々五々五々は黄に三々は白しきとく記得す去年此

路よりす

憐たんぼほしる蒲公荃短して乳うるほすを温

むかしくしきりにおもふ慈母の恩慈母の懐くわいはう抱別くわいはうに春あり

春あり成長して浪花なにはにあり梅は白し浪花橋らうくわけう辺財主の家

春情まなび得たり浪花風流なにはふり

郷を辞し弟そむいに負て身さんしゆん三二春本をわすれ末とるつぎきを取接木の梅

故郷春深ゆきゆきし行々ゆきゆくて又行々やうりう楊柳ちやうてい長堤やうや道漸よくくれたり

矯首まっはじめて見る故園の家黄昏戸くわうこんに倚る白髪の人弟を抱き我

を待春又春

君不見みずや古人太祇が句

藪やぶ入いりの寝ぬるやひとりの親おやの側そば

なおこのほかによどがわのうた 澗河歌 三首あり。これらは紀行的韻文とも見るべく、諸体混こん淆こうせる叙情詩とも見るべし。惜しいかな、蕪村はこれを一篇の長歌となして新体詩の源を開く能わざりき。俳人として第一流に位する蕪村の事業も、これを広く文学界の産物として見れば誠に規模の小なるに驚かずんばあらず。

蕪村は鬼貫句選ぼつの跋ぼつにて其角、嵐雪、素堂、去来、鬼貫を五子ごしと称し、春泥集の序にて其角、嵐雪、素堂、鬼貫を四老しろうと称す。中にも蕪村は其角を推したらんと覚ゆ、「其角は俳中の李青蓮と呼ばれたるものなり」といい「読むたびにあかず覚ゆ、これ角がまされるところなり」ともいえり。しかもその欠点を挙げて「そ

の集をけみ閱するに大かた解しがたき句のみにてよきと思う句はまれ
 まれなり」といい「百千の句のうちにてめでたしと聞ゆるは二十
 句にたらず覚ゆ」と評せり。自己が唯一の俳人とあが崇めたる其角の
 句を評して佳かじゆう什二十首に上らずという、見るべし蕪村の眼中に
 古人なきを。その五子と称し四老と称す、もとより比較的の讃辞
 にして、芭蕉の俳句といえどもその一笑を博するに過ぎざりしな
 らん。蕪村の眼高きことかくのごとく、手腕そまたこれにそ副う。而
 して後に俳壇の革命は成れり。

ある人かんようきゆう咸陽宮の釘かくしなりとて持てるを蕪村はそし誹りて

「なかなか咸陽宮の釘隠しと云わずばめでたきものなるを無念
 のことにおぼゆ」といえり。蕪村の俗人ならぬこと知るべし。蕪

村かつて大高源吾より伝わる高麗こうらいの茶碗というをもらいたるを、それも咸陽宮の釘隠しの類なりとて人にやりしことあり。またある時松島にて重さ十斤ばかりの埋木の板をもらいて、辛うじて白石の駅に持ち出でしが、長途の労れ堪つかうべくもあらずと、旅舎に置きて帰りたりとぞ。これらの話を取りあつめて考うれば、蕪村の人物はおのずから描き出されて目の前に見る心地す。

蕪村とは天王寺蕪かぶらの村ということならん、和臭を帯びたる号なれども、字面じづらはさすがに雅致ありて漢語として見られぬにはあらず。俳諧には蕪村または夜半亭の雅名を用うれど、画には寅いん、春星、長ちようこう庚、三菓、宰鳥、碧雲洞へきうんどう、紫狐庵等種々の異名ありきとぞ。かの謝蕪村、謝寅、謝長庚、謝春星など言える、門弟に

も高こう几ぎ董とう、阮げん道どう立りつなどある、この一事にても彼らが徂徠派の影響を受けしこと明らかなり。二字の苗字を一字に縮めたるは言うまでもなく、その字面より見るも修辭派の臭味を帯びたり。

蕪村の絵画は余かつて見ず、ゆえにこれを品評すること難かたしいえども、その意匠につきては多少これを聞くを得たり。(筆力等の技術はその書及び俳画を見て想像するに足る) 蕪村は南宗より入りて南宗を脱せんと工夫せしがごとし。南宗を学びしはその雅致多きを愛せしならん。南宗を脱せんとせしは南宗の粗そ鬆しょうなる筆法、狭きやう隘あいなる規模がよく自己の美想を現わすを得ざりしがためならん。彼は俳句に得たると同じ趣味を絵画に現わしたり、もとより古人の粉ふん本ほんを摸もし意匠を剽ひやう竊せつすることをなさざり

き。あるいは田舎の風光、山村の景色等自己の実見せしもの（かつ古人の画題に入らざりしもの）を捉え来たりて、支那的空想に耽りたる絵画界に一生面を開かんと企てたり。あるいは時間を写さんとし、あるいは一種の色彩を施さんとして苦心したり。（色彩に関する例を挙げれば春の木の芽の色を樹によつて染め分けたるがごとき、夜間燈火の映じたる樹を写したるがごとき）絵画における彼の眼光はきわめて高く、到底応挙、呉春らの及ぶところにあらず。しかれども蕪村は成功する能わずして歿し、かえつて豎子じゆしをして名を成さしめたり。

蕪村の画を称する者多く俳画をいう。俳画は蕪村の書きはじめしものにして一種摸すべからざるの雅致を存す。しかれども俳画

は字のごときもののみ、ついに画にあらざ、画を知らざるものこ
れをもつて画となす、取らざるなり。蕪村の字支那の書風より出
でてやや和習あり。縦横自在にして法度にかかわらず、しかも俗
気なきこと俳画に同じ。

蕪村の文章流暢りゆうちやうにして姿致しちあり。水の低きに就つくがごとく
停滞するところなし。恨むらくは彼は一篇の文章だも純粹の美文
として見るべきものを作らざりき。

蕪村の俳句は今に残りしもの一千四百余首あり、千首の俳句を
残したる俳人は四、五人を出でざるべし。蕪村は比較的多作の方
なり。しかれども一生に十七字千句は文学者として珍とするに足
らず。放翁は古体今体を混じて千以上の詩篇を作りしにあらずや。

ただ驚くべきは蕪村の作が千句ことごとく佳句なることなり。想
うに蕪村は誤字違法などは顧みざりしも、俳句を練る上において
は小心翼翼々として一字いやしくもせざりしがごとし、古来文学
者のなすところを見るに、多くは玉石混淆こんこうせり、なすところ多
ければ巧拙ふたつながらいよいよ多きを見る。杜工部集とこうぶのごときこ
なり。蕪村の規模は杜甫とほのごとく大ならざりしも、とにかく千首
の俳句ことごとく巧みなるに至りては他に例を見ざるところなり。
蕪村の天材は咳唾がいだことごとく珠たまを成したるか、蕪村は一種の潔癖
ありていやしくも心に満たざる句はこれを口にせざりしか、そも
そも悪句は埋没して佳句のみ残りたるか。余は三者皆原因の一部
を分有したりと思う。俳句における蕪村の技倆は俳句界を横絶せ

り、ついに芭蕉、其角の及ぶところにあらず。連句もまた蕪村は蕪村流を応用して面目を新たにせり。しかれども蕪村は芭蕉が連句に力を用いしだけ熱心には力をここに伸ばさざりき。

蕪村の俳諧を学びし者月居、月溪、召波、几圭きけい、維駒いく等皆師の調を学びしかども、ひとりその堂に上りし者を几董きとうとす、几董は師号を継ぎ三世夜半亭を称となう。惜しむべし、彼れ蕪村歿後数年ならずしてまた歿し、蕪村派の俳諧ここに全く絶ゆ。

明治二十九年草稿

明治三十二年訂正

青空文庫情報

底本：「日本の文学 15」中央公論社

1967（昭和42）年6月5日初版発行

1973（昭和48）年7月30日10版発行

入力：蔣龍

校正：米田

2010年12月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

俳人蕪村

正岡子規

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>